

## 硬質プラスチックをリサイクル、国内循環へ～株式会社エコロ（前）

埼玉県入間郡三芳町に、株式会社エコロ（本社：埼玉県富士見市）の「所沢マテリアルセンター」はある。ここでは、プラスチックリサイクルを行っているが、同社が特に力を入れているのが、リサイクル材としても汎用性のある硬質系の廃プラだ。さらに、同社において特筆に値するのは、自治体からの排出プラも、引取り、リサイクルしているという点だ。廃棄物処理業界にも長く身を置いてきたがゆえに、さまざまな問題解決に先鞭をつける後藤雅晴氏に話を聞いた。

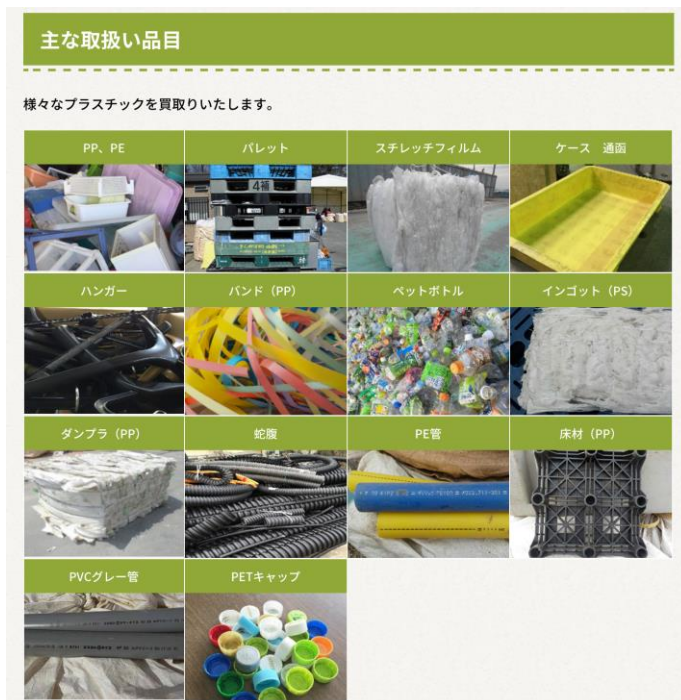
### 廃プラをペレット化、早くから国内循環をビジョンに



エコロ「所沢マテリアルセンター」

エコロは2011年5月に設立された。当初から国内で排出された廃プラを集荷し、中国などにベール状にして輸出をしていた。後藤社長は、現地でもリサイクル事業を行っていたが、しかしそこで開梱したベールを見て、愕然としたという。

「表面からは分かりませんでした。中身を見たら海外ではリサイクル不可品がはいておりました。僕らが不快に感じるものを、海外の人が同じように感じないわけではない。このビジネスは、早晩立ちいかなくなると思いました」



エコロが主に扱う硬質プラスチック(HPより)

同国が経済成長を続けるなかで、リサイクルに関わる人材の件数も高騰することは、容易に想像できた。そこで、自社（国内）でリサイクル部門を作ることを決意。2015年には海外市場から、国内で循環させるビジネスモデルへと舵を切った。同社は、神奈川県綾瀬市にも、拠点を有しており、当時はこの「綾瀬リカバリーセンター」にて、プラスチックの再資源化を開始した。これは、中国が廃プラの禁輸を始める2年前のことになる。今年1月からは、バーゼル法により、汚れたプラの輸出も厳重に規制されるようになった。後藤社長の読みは、まさに的を得

ていたのだ。

現在は、このリサイクルプラントは「所沢マテリアルセンター」に移管され、ここで月間約200トン弱のプラスチックリサイクルを行っている。同社が廃プラ処理において、特化しているのが、ポリプロピレン（PP）、ポリエチレン（PE）、ポリ塩化ビニル（PVC）など、いわゆる硬質プラスチック類だ。近隣の発生工場から回収し、破碎機、磁選機、粉碎機、比重選別装置を経てフレーク化される。

これら再生材は、非常に品質管理に厳しい国内でも採用されるグレードで、各容器成形メーカーへ樹脂資源として売却される。なお、前出の「綾瀬リカバリーセンター」では、これらフレークのペレット化も行なっており、これも国内、また再生材であることから、中国や他国に販売もされている。

### 自治体排出の硬質プラスチックもリサイクル

さらに他の産廃プラ再生会社と趣を異にしているのは、同社では自治体からの排出プラのリサイクルを行なっている点。現在、4市および1部事務組合の計5団体から受入れている。しかし、いわゆる一廃ごみからの排出プラは、汚れや混合されたものも多く、再生はかなり難しいのではないかと？



後藤雅晴社長

「そんなことはありません。当社は硬質プラのリサイクルに特化していることから、ポリバケツ、衣装ケース・その他PP/PE材を回収し、処理していますが、こうしたものは、排出時にしっかり分別されていれば、再生処理することは困難ではありません。行政が、いかに住民に対し、分別の徹底を呼びかけるか、また回収後に分別できるかが、大きいのです」（後藤社長）

それゆえ、エコロには自治体からの引取り要請もあるが、実際に現場に赴き、しっかりした分別状態にあるかをチェック、同社の基準に満たない場合には、取引に応じないという。

「例えば、柄の部分がプラスチックのホウキがありますが、あれは中身の材質は木材であることが多い。そういったものを平気で混ぜている行政さんとは、お付き合いができません。当社が引き取っているのは、主に粗大ゴミ系のプラスチックが多いため、分別も比較的容易であると思います。これは産廃に関しても同様ですが、当社のスタッフは、プラスチックの『目利き』でもあるので、しっかり回収品をチェックします。それゆえ、品質の高い再生品が作れるのです」（後藤社長）

同社は「綾瀬リカバリーセンター」では「壁紙」のリサイクルも行っている。これは、国内でもユーザーの多い「猫砂」・「PVCマット」にリサイクルされるのだという。次

回は、ユニークな経歴を持つ後藤社長のプロフィールとともに、同氏のリサイクルに対する理念を紹介したい。

(IRuniverse Kaneshige)